

Title	[論説] 村上春樹「納屋を焼く」における新美南吉童話との間テクスト性
Author(s)	道合, 裕基
Citation	社会システム研究 = Socialsystems : political, legal and economic studies (2017), 20: 359-368
Issue Date	2017-03-30
URL	https://doi.org/10.14989/220415
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

村上春樹「納屋を焼く」における 新美南吉童話との間テキスト性

道 合 裕 基

1. はじめに

村上春樹（1949～）の短編「納屋を焼く」（1982年3月『新潮』に発表）は、「謎」が「謎」のまま残される奇妙な作品である。この村上の作品については、「納屋を焼く」という発言の意味を考察するものや、ウィリアム・フォークナー（1897～1962）の短編「納屋を焼く」（1939）からの影響を指摘する先行研究等が発表されている¹⁾。近年、材源に関しては、フォークナーからの影響だけでなく、スコット・フィッツジェラルド（1896～1940）の代表作『グレート・ギャツビー』（1925）からの影響を読み解く研究もある²⁾。本稿では、この材源、間テキスト性に関して、新美南吉（1913～1943）のいくつかの童話との関係に着目したい。

「納屋を焼く」では、主人公による新美南吉の童話「手袋を買いに」（1943）を示すと思われる学芸会の出し物への言及がある。この場面の意味については、麻薬の作用による朦朧とした状態のため事実を混同しているにすぎないとする解釈³⁾があるほかは、あまり重要視されていない。

この軽視は、フォークナーや『グレート・ギャツビー』と異なり、「納屋を焼く」の物語中で、新美の名前、作品名に直接言及されていないことが関わっているだろう。しかし、主人公が、麻薬の作用で過去を思い出した際に、「手袋を買いに」の劇に言及していることは、何らかの意味があると思われる。そこで、本稿では、これまで指摘されることが稀であった「手袋を買いに」を中心に、「最後の胡弓弾き」（1939）、「おじいさんのランプ」（1942）、「ごん狐」（1932）などの新美南吉の童話と「納屋を焼く」との間テキスト性について考察する。

2. 「納屋を焼く」の「謎」をめぐって

まずは、新美南吉の童話との間テキスト性の可能性を論じる前提として、便宜上、以下に「納屋を焼く」の梗概を示す。

[梗概]

作家の「僕」が過去を回想するという形式を採る。「僕」は、パーティーで知り合った「彼女」と付き合っていた。アルジェリア旅行に出かけた「彼女」は、新たな恋人と思しき「彼」と帰国する。「彼」は、身だしなみや金回りが良く、貿易の仕事をしているとのことだが、素性が

良く分からない。

そんなある日、「彼女」と「彼」が「僕」の自宅を訪れる。「僕」は、「彼」にマリファナを勧められ、朦朧としている。そのとき「彼」が「納屋を焼く」ことを趣味にしていると言う。そして、この近くにある納屋を焼く予定であると告げた。後日、「僕」は、付近の納屋の数・場所を把握した。しかし、いつまで経っても納屋は焼けない。「彼」と偶然再会した「僕」が、納屋の事を聞くと、納屋はすでに焼いたと答える。だが、納屋は焼けておらず、「僕」は不思議に思う。そして、「彼女」とは連絡が取れない。結局、「納屋を焼く」の意味は明かされないまま、物語は終わる。

*

村上春樹の「納屋を焼く」では、「彼」の発した「納屋を焼く」という言葉の意味が、「謎」のまま残り、この言葉の意味をめぐる解釈に重点が置かれてきた。つまり、「彼」の言葉は、文字通りの意味ではなく、「納屋を焼く」が「殺人」の隠喩であるという「読み」が提示されている。この解釈は、「彼女」が行方不明になっている点、男の素性のわからなさ、マリファナの使用といった状況からも、説得力をもつ。すなわち、「納屋を焼く」は、発覚していない殺人事件の顛末を描いた作品と読めるということである。

「納屋を焼く」が、殺人事件を描いたミステリー的な性格を帯びた作品であるということは、興味深い「読み」方の一つと言えるだろう。こうした解釈を踏まえつつ、以下、「彼」の「納屋を焼く」という発言と新美南吉の童話との関連を考察していきたい。

3. 言及される新美南吉の童話について

ある小説の中に、別の小説のタイトル、登場人物名、一節の引用などから自らの作品との連想を狙う技法を、間テキスト性と言う⁴⁾。前述のように、「納屋を焼く」には、フォークナーの「納屋を焼く」を想起させる場面や、『グレート・ギャツビー』に言及されている。次に引用するのは、「僕」が、アルジェリアから帰国する「彼女」を空港で待機する場面である。

飛行機が着くと — 飛行機は悪天候のために実に四時間も遅れて、そのあいだ僕はコーヒー・ルームでフォークナーの短篇集を読んでいた — 二人が腕を組んでゲートから出てきた。(村上、1987)

ここでは、フォークナーの短篇集に言及され、フォークナーの「納屋を焼く」との繋がりを連想させる。村上自身は、執筆当時、フォークナーの作品の存在を知らなかったと答えているが⁵⁾、材源の特定に対する否定と解するのが妥当であろう。すでに指摘されているが、「納屋を焼く」が、選集に収録される際に、「フォークナーの短篇集」は、「週刊誌」へと変更されている。この

ことから材源の一つであるという指摘もある。

「納屋を焼く」の物語中で、言及されるもう一つの作品であるフィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』であるが、次のように触れられている。以下は、「彼」の仕事をめぐる「僕」と「彼女」の会話である。

「貿易の仕事ってそんなにもうかるのかな？」

「貿易の仕事？」

「彼がそう言っていたよ。貿易の仕事をしてるんだってさ」

「じゃあ、そうなんですよ。でも……よくわかんないのよ。だってべつに働いているようには見えないんだもの。よく人に会ったり電話をかけたりはしてるみたいだけど、とくに必死になっているって風でもないし」

「まるでギャツビーだね」(村上、1987)

引用箇所では、「彼」の仕事をめぐる、やり取りがなされている訳であるが、「僕」は、「彼」を「ギャツビー」のようだと呼ぶ。職業がよく分からないが、裕福なギャツビーと「彼」の類似がここで指摘されている。

この言及は、村上が、フィッツジェラルドを愛読し、かつ『グレート・ギャツビー』を翻訳していることから、「納屋を焼く」に影を落としていることが窺えるだろう。先行研究でも、すでにこの二つの作品との影響関係が論じられている⁶⁾。

だが、繰り返し述べたとおり「納屋を焼く」の作中では、新美南吉の童話「手袋を買いに」に言及されていない。しかし、「僕」が、そのあらすじを思い出す場面があり、あらすじから作品が何であるのかが分かるようになっている。次の引用は、「納屋を焼く」で、「僕」が、マリファナを吸いながら、過去のことを思い出す場面である。

僕はどういうわけか小学校の学芸会でやった芝居のことを思い出した。僕はそこで手袋屋のおじさんの役をやった。子狐が買いにくる手袋屋のおじさんの役だ。でも子狐の持ってきたお金では手袋は買えない。

「それじゃ手袋は買えないねえ」と僕は言う。ちょっとした悪役なのだ。

「でもお母さんがすごく寒がっているんです。あかぎれもできてるんです。」と子狐は言う。

「いや、駄目だね。お金をためて出なおしておいで。そうすれば

「時々納屋を焼くんです」

と彼が言った。(村上、1987)

「僕」が、「彼」から「納屋を焼く」ことが趣味であると聞かされる直前に考えている内容が、この学芸会の記憶である。ここでは出し物が何であるか明言されないものの、登場人物や台詞が

ら新美南吉の「手袋を買いに」であることが分かる。

新美南吉の「手袋を買いに」は、小学校の国語科の教科書にも掲載されており、南吉の童話でも有名な作品である⁷⁾。防寒用の手袋を買うため、人間の住む町を訪れた子狐と人間（帽子屋）の接触を描く心温まる童話である。だが、「僕」は、ストーリー展開を混同しており、子狐は手袋を買うことは出来ず、帽子屋のおじさんも意地が悪い人物というように誤認している（さらに、「手袋を買いに」では、「手袋屋」ではなく、「帽子屋」が正しい）。この誤認は、麻葉の影響で朦朧としていたからと説明することは容易いが、なぜ「彼」から「納屋を焼く」ことを趣味としていると告げられる直前に、新美南吉の「手袋を買いに」の劇化の記憶が差し挟まれるのだろうか。続いて、「手袋を買いに」からの連関へと移りたい。

3.1 「手袋を買いに」との関連

「手袋を買いに」では、子狐と人間の交流が、両者にとって好ましい結果をもたらしていた。この交流は、ややもすると、人間側からの迫害という不幸な結果を招くことにもなりかねない。母狐が、人の住む町に入れず、足が竦む場面や、子狐から人間の対応を聞いた「ほんとうに人間はいいものかしら、ほんとうに人間はいいものかしら」という母狐の台詞の繰り返して終わることなどに人と狐の関係が示されている。人間ではない子狐に手袋を売ってあげた帽子屋のおじさんは、渡されたお金が本物だったという理由もあるが、誠実な対応をしたと言えるだろう。悪人であれば、金だけを奪う可能性もあり、子狐は運が良かっただけでも解釈可能である。ここで、母狐の抱く人間のイメージと、子狐の抱く人間のイメージのあいだにはズレが生じている。母狐は、人間が良い存在か、それとも悪い存在（恐ろしい存在）かの判断に迷っている。この人間の善悪についての判断は、「納屋を焼く」における「彼」が、善人であるか、悪人であるかが分からないという両義性・不明瞭さと関わるのかもしれない⁸⁾。

「納屋を焼く」の「彼」は、「納屋を焼く」＝「放火」を趣味としていると発言していることに加え、殺人者という疑惑も浮上している。だが、「彼」を放火犯・殺人犯と断言するのは難しい。疑わしい要素は見られるものの、「彼」の容貌や身なりの良さ、態度などからは、善人か悪人かは、どちらとも言えないからである。「手袋を買いに」は、「彼」が善悪の判断が困難な両義的存在であることから、「納屋を焼く」と結び付くのである。そのため、「納屋を焼く」の学芸会の記憶では、原作とは異なる意地悪な帽子屋として描かれているのではないだろうか。

また、この微笑ましい童話の展開が、意地悪な帽子屋と子狐の交流へと変容している理由として、「彼」の帯びる両義性だけでなく、次に取り上げるその他の新美の童話との関連も考えられる。

3.2 「最後の胡弓弾き」との関連

「納屋を焼く」における記憶の混同に関して、もう一つの童話「最後の胡弓弾き」を取り上げたい。「手袋を買いに」と同じく新美南吉の童話の代表作で、「ごん狐」と後述する「おじいさん

のランプ」と同等の知名度を誇る。時代に取り残される男の悲劇を描いたもので、小説、童話というジャンル区分が曖昧な作品である。なお、年月の経過による悲劇という点では、「おじいさんのランプ」と主題を同じくする。

「最後の胡弓弾き」は、副業で、胡弓を用いた門付け芸を行う農民・木之助の物語で、12歳から40代半ばまでの時間の経過が描かれる。主人公は、時代の流れにより、胡弓を聞いてくれる者がいなくなったので、胡弓を売る。すぐに後悔し、自分が売った胡弓を買い戻そうとするが、古物商の女主人から法外な値を付けられ、売ってもらえない。寂しげな主人公の描写で終わる悲哀に満ちた作品である。

この童話では、意地の悪い強欲な古物商が登場する。主人公である木之助は、胡弓を買うことが出来ず、悲嘆に暮れる。「手袋を買いに」の帽子屋とは大違いである。次に、「手袋を買いに」の帽子屋と狐のやり取りの場面と、「最後の胡弓弾き」の古物商とのやり取りからの引用を併置する。

帽子屋さんは、おやおやと思いました。狐の手です。狐の手が手袋をくれと言うのです。これはきっと木の葉で買いに来たんだなと思いました。——中略——ほんとお金だと思いましたので、棚から子供用の毛糸の手袋をとり出して来て子狐の手に持たせてやりました。子狐は、お礼を言ってまた、もと来た道を帰り始めました。（「手袋を買いに」）

木之助の財布を持っている手が怒りのために震えた。

「やだきゃ、やめとけよ」と女主人は遮って素気なくいった。木之助は財布の中を見るとき十五銭しかなかった。いつもの習慣で家を出るとき金を持って出なかった。——中略——足の先の凍えが急に身に沁みた。木之助は右も左もみず、深くかがみこんで歩いていった。（「最後の胡弓弾き」）

これら二つの童話で、それぞれ買おうとする物は、手袋と胡弓というように異なる。また売り手の人物造型が、悪人と善人という相違があり、男女の性別も異なる。「僕」の記憶の混同は、マリファナの作用によって引き起こされたものかもしれないが、同じ新美南吉の童話で、似たような場面が描かれる「最後の胡弓弾き」との混同の可能性が想定される。

この混同は、作者である村上の誤認にすぎないと断じることは易しい。だが、この物語のメイン・テーマである「納屋を焼く」という言葉が発せられる直前に、学会会での「手袋を買いに」の記憶に言及されることは、誤認だけで片付けられるものではない。なぜならば、物語の重要な場面で、何の意味もない新美南吉の童話に言及されるとは考えにくいからである。さらに、村上が、自身の作品に先行する文学作品・作家名や、固有名詞を多用するという特徴があることから、「納屋を焼く」を読み解く鍵の一つと言えるだろう。単に、新美南吉の童話に言及したのではなく、新美南吉の童話が、「納屋を焼く」という物語とのストーリーやモチーフの関連性など

を喚起する技法と見なすことが妥当であろう。

3.3 「おじいさんのランプ」の関連

これまで、「納屋を焼く」に描かれる「手袋を買いに」の挿話に着目し、「納屋を焼く」との連関を概観してきたが、「納屋を焼く」、放火というモチーフでつながる新美の童話がある。それは、彼の代表作「おじいさんのランプ」である。

「おじいさんのランプ」は、文明化が進んでいく世の中で、翻弄される人物を描き出している。ランプ屋であった若き日のおじいさんは、電気が引かれたことに立腹し、その怒りに駆られて、区長の牛小屋に放火をしようとしている。次の引用は、若き日のおじいさんが、放火をしようとする場面である。

区長さんの家には長い間やかかいになっていたので、よくその様子はわかっていました。火をつけるのにいちばん都合のよいのは藁屋根の牛小屋であることは、もう家を出るときから考えていた。——中略——「マッチを持って来りゃよかった。こげな火打ちみてえな古くせえもなァ、いざというとき間にあわねえだなァ」そういつてしまつて巳之助は、ふと自分の言葉をききとがめた。

「古くせえもなァ、いざというとき間にあわねえ、……古くせえもなァ間にあわねえ……」
(「おじいさんのランプ」)

引用箇所では、「牛小屋」という語が使用されているが、牛用の「納屋」が、「牛小屋」であることから、「納屋を焼く」との親近性がうかがえる。しかし、「おじいさんのランプ」は、「納屋を焼く」と異なり、放火をせずに、新たな生き方を選んだ男の話である。おじいさんは、火打石と同じく、ランプが時代遅れであることを悟り、放火を止めるのであった。ランプ屋を廃業の後、本屋になり、商売も成功し、孫に恵まれた幸福な家庭を築いている。放火をすること（納屋を焼くこと）は、逆恨みによる犯罪である。おじいさんは、その過ちに気づき、思い止まっている。

一方、「納屋を焼く」の「彼」は、「納屋を焼く」ことを趣味にしている。「彼」が、「納屋を焼く」のを趣味にしているというのは、その言葉を文字通りの意味に解釈し、放火と捉えるにしても、「殺人」の隠喩として解釈するにしても、いずれも何らかの犯罪と関わることは回避出来ない。おじいさんが、納屋を焼くことを止め、穏やかな家庭を持っているのに対し、「彼」は、不穏な犯罪の世界から切り離せない存在と言えらる。

つまり、「納屋を焼く」において、「彼」の「納屋を焼く」という発言の直前に、新美南吉の「手袋を買いに」の一場面が想起されるのは、新美および童話群との連想を導き出すためと考えられる。具体的には、望んだ物を売らない意地悪な商人、納屋を焼こうとする物語という連想である。

しかし、ここで一つ疑問が残る。では、なぜ「手袋を買いに」ではなく、直接、「おじいさん

のランプ」のタイトルや、新美南吉の名などを「納屋を焼く」の物語中で提示しなかったのか。直接、明示した方が読者に意図が伝わるのではないか。この疑問に関しては、村上が、フォークナーの「納屋を焼く」について、その材源としての可能性を否定していることから説明が付けられそうである。

村上は前述の通り、「納屋を焼く」で、「僕」がフォークナーの短篇集を読んでいる場面を書いている。このことから「納屋を焼く」は、フォークナーの「納屋を焼く」との連想が容易である。だが、村上は、フォークナーの「納屋を焼く」を知らないし、読んでいないと語り、タイトル等は偶然の一致にすぎないと片付けている。

村上の説明は、作者自身が材源の可能性を否定する事例とも言えるが、疑義が残る。とにかく、村上は、自身の作品の材源について、あまり他人から指摘されたくないと考えているように推測できる。

他にも、村上は、『ダンス・ダンス・ダンス』（1988）においては、ジェームス・パリ（1860～1937）の『ピーター・パン』（1911）には、直接言及せず、二つの物語間の連想を可能にしている⁹⁾。また、『1Q84』の「BOOK3」（2010）では、内田百閒（1889～1971）の「東京日記」（1938）を作者・作品名を挙げずに引用している。上田穂積は、この百閒からの引用箇所は、『1Q84』のストーリー展開と重なる点はないが、引用されていない他の場面から「父親」をめぐるテキストという共通点が見出せると指摘している（上田、2011）。つまり、肝心の箇所の引用をせず、自身の作品との関連性をぼかす形になっているのである。

村上による物語中での引用は、直接作者・作品名、該当箇所と言及するよりも、共通するモチーフの多用によって、自身の作品の重層性を表現する技法と捉えることも出来るだろう。このことを「納屋を焼く」における「手袋を買いに」に代表される新美南吉童話の意味に敷衍すると、村上による材源特定の拒否だけでなく、技法的な側面から直接の言及が回避されたと解せるだろう。

3.4 「ごん狐」との関連

もう一つ、「納屋を焼く」との関連をうかがわせるのが、新美の代表作「ごん狐」である。国語科の教科書での定番教材となっている狐のごんと兵十とのすれ違いによる悲劇を描いた作品で、ごんの死の場面が有名である。だが、この童話は、ストーリー展開上は、「納屋を焼く」との共通点を指摘することは難しい。

ストーリー上の類似点は見出せないものの、「ごん狐」の成立事情には、「納屋を焼く」との関連がうかがえる。現在、新美南吉の童話群では、「ごん狐」の研究が一番進展しており、その内容は多岐にわたる。そのうち、書誌学的研究から『赤い鳥』の主宰である鈴木三重吉（1882～1936）によって、新美の原稿が勝手に改変されたことが、指摘されている¹⁰⁾。ただし、ストーリーが変えられているといったことではなく、主に三重吉が、「方言」とみなした語が改められている程度である。この三重吉による改変は、現在残されている新美直筆原稿と『赤い鳥』掲載

時の本文が対比され、改変箇所が明らかとなっている。

有名な改変箇所としては、「ごん狐」の本文中に兵十の家の「物置」という語があるが、ここは本来、全て「納屋」という語が使用されていた¹¹⁾。この改変は、三重吉が、「納屋」を方言とみなして勝手に行ったものである。しかし、編集の際、一箇所だけ、「納屋」という語を見落としたので、現行の「ごん狐」のテキストには、「物置」と「納屋」という語が混在しているのである。

この書誌学的研究の成果を踏まえると、「ごん狐」には、成立の際に「納屋」という語を消された童話という性格が浮かび上がる。だが、村上が、「ごん狐」の書誌学的な改変事情を知っていたか否かは判然としない。しかし、「納屋」という語が消された童話という意味では、「ごん狐」には「納屋を焼く」との共通点が見られる。そのことを補強するのは、「納屋を焼く」の物語中で、「彼」が発した「納屋が消えてしまうんです」という言葉である。「彼」は、納屋が焼失することを「消えた」と述べているだけかもしれないが、納屋が消えることをめぐる「謎」が描かれた物語「納屋を焼く」と「納屋」という語が消えた童話「ごん狐」という連関をもたらしていることは興味深い。さらに、ここでは、「焼失」と「消失」という掛け言葉的な意味も包含されているかもしれない。

4. おわりに

これまで、村上春樹「納屋を焼く」における新美南吉童話との間テキスト性について考察してきた。繰り返し述べたように、村上春樹は、「納屋を焼く」の着想源、新美南吉の童話からの影響や、思い入れなどについては語っていない。しかし、物語中では、「納屋を焼く」という発言の直前に、「僕」の「手袋を買いに」の思い出が語られており、新美南吉の作品からの関連を想起させた。

そこでは、「手袋を買いに」の細部の混同から「最後の胡弓弾き」が連想され、放火のモチーフから「おじいさんのランプ」における「納屋を焼く」という選択をしなかったおじいさんと「納屋を焼く」ことを趣味とする「彼」という反転像が見られた。さらには、「納屋が消された」物語と「納屋」という語が消された童話という共通点から、「納屋を焼く」と「ごん狐」が結び付けられた。つまり、「納屋を焼く」において言及される新美南吉童話は、「連歌」的なイメージ連想を可能にする重要なモチーフと言うことが出来るだろう。「納屋を焼く」における新美南吉作品への間接的言及は、材源を曖昧にするためのものではなく、村上の技法の一種として肯定的に捉えるべきであろう。

今後、村上の作品における先行作品からの受容の痕跡を探るとともに、新美南吉の童話が、後世の文学作品に与えた影響についても考察することを課題としたい。

注

- 1) 「納屋を焼く」という言葉が、「殺人」の隠喩であるとする読みは、(多田、1998) などがあり、フォークナーの「納屋を焼く」との比較・対比については、(森本、2004) が挙げられる。他に、物語中での「同時存在」という言葉に着目した研究として(申、2009) がある。
- 2) 『グレート・ギャツビー』からの影響については、(小島、2008) を参照。
- 3) 山根由美恵は、マリファナにより「現実が幾つも分裂していき、過去の記憶も変化させられる」と述べており、こうした曖昧さが、「納屋を焼く」というテキストを特徴付けていると論じる(山根、2009)。
- 4) 『フランケンシュタイン』における間テキスト性については、(廣野、2005) を参照。例えば、メアリー・シェリー(1797~1851) の『フランケンシュタイン』(1818) には、ゲーテ(1749~1831) の『若きウェルテルの悩み』(1774) やミルトン(1608~1674) の『失樂園』(1667) が効果的に言及されている。ちなみに、新美南吉は、ロレンス(1885~1930) やマンズフィールド(1888~1923) を愛読し、生前未発表ながら翻訳も残している。新美南吉と外国文学との関係については、(原、1991) に紹介されている。また、新美のロレンスの訳業についての研究としては(増口、2015) がある。
- 5) 「自作を語る」『村上春樹全作品 1979~1989』講談社、1990年。
- 6) 小島基洋は、ギャツビーと「納屋を焼く」の「彼」の親近性を指摘している(小島、2008)。
- 7) 「手袋を買いに」についての研究は、(半田、1998) などがある。「手袋を買いに」は、小学校の国語教科書に掲載されていることから、人間と狐の交流、母子の愛情などがその主題として指摘されてきた。
- 8) 西田谷洋は、帽子屋のおじさんは、「商業資本主義」の世界でのルールに従ったという点で「善良」であるとし、母狐と子狐、両者ともに人間の認識に偏向と誤りが見られるとする(西田谷、2013)。
- 9) 『ピーター・パン』との間テキスト性については、(小林、1998) を参照。小林は、「異界」訪問と帰還、ワニの挿話、影のモチーフ、片腕のない登場人物、魔法の粉などの共通点を挙げている。
- 10) 「ごん狐」の成立事情、改稿については、(木村、1999 府川、2000) などに詳しい。「ごん狐」や新美南吉童話の民俗学的読解については、(畑中、2013) を参照。
- 11) 鶴田清司は、小学校の授業で、兵十が、貧乏な農民であるにもかかわらず、「物置」と「納屋」の二つを持っているのがおかしいという感想があったと報告している(鶴田、1993)。原稿の対比だけでなく、小学生の直感からも「納屋」と「物置」の混在が指摘出来る証左と言えるだろう。

参考文献

- 上田穂積「村上春樹、内田百閒を引用する——「1Q84」への視座、あるいは志賀直哉」『比較文化研究所年報』第27号、徳島文理大学、2011年。
- 木村功「新美南吉「権狐」論：「権狐」から「ごんぎつね」へ」『岡山大学研究集録』111、1999年。
- 小島基洋「村上春樹「納屋を焼く」論：フォークナーの消失、ギャツビーの幻惑」『文化と言語：札幌大学外国語学部紀要』69、札幌大学、2008年。
- 小林正明『村上春樹 塔と海の彼方に』森話社、1998年。
- 申惠蘭「納屋が消える世界——村上春樹『納屋を焼く』論」『法政大学大学院紀要』62、法政大学、2009年。
- 多田道太郎『変身放火論』講談社、1998年。

- 新美南吉「手袋を買いに」『新美南吉童話集』岩波書店、1996年。
——「おじいさんのランプ」上記掲載書所収。
——「最後の胡弓弾き」上記掲載書所収。
——「ごん狐」上記掲載書所収。
- 鶴田清司『「ごんぎつね」の〈解釈〉と〈分析〉』明治図書出版、1993年。
- 西田谷洋『新美南吉童話の読み方』双文社出版、2013年。
- 畑中章宏『ごん狐はなぜ撃ち殺されたのか 新美南吉の小さな世界』晶文社、2013年。
- 原昌「新美南吉と翻訳」『比較児童文学論』大日本図書、1991年。
- 半田淳子「新美南吉「手袋を買いに」を読む — 父きつねの不在をめぐって —」『学芸国語国文学』30、東京学芸大学、1998年。
- 廣野由美子『批評理論入門 — 『フランケンシュタイン』解剖講義』中央公論社、2005年。
- 府川源一郎『「ごんぎつね」をめぐる謎 — 子ども・文学・教科書』教育出版、2000年。
- 増口充「D・H・ロレンス著、新美南吉訳「すみませんが切符を」について — 新美のロレンス受容と翻訳」『21世紀のD・H・ロレンス』日本ロレンス協会編、2015年。
- 村上春樹「納屋を焼く」『螢・納屋を焼く・その他の短編』新潮社、1987年。
——「自作を語る」『村上春樹全作品 1979～1989』講談社、1990年。
- 森本真一「フォークナーと村上春樹」『學苑』763、昭和女子大学、2004年。
- 山根由美恵「二つの「納屋を焼く」：同時存在の世界から「物語」へ」『広島大学大学院文学研究科論集』69、広島大学、2009年。